

ドイツにおけるカリキュラム開発についての調査及び資料収集

教育学研究科 博士後期課程 1年

市川 和也

ドイツ

2018年9月1日～2018年9月12日

計画の概要

本調査の目的は、ドイツで取り組まれているカリキュラム開発についての調査及び資料収集を行うことです。私は特に、1970年代以降特色あるカリキュラムの開発を独自の方法で行っているビーレフェルト実験学校（Laborschule Bielefeld）を調査しました。ビーレフェルト実験学校は1974年に設立されました。当時の西ドイツはアメリカから「カリキュラム」概念を受容し、カリキュラム改革が隆盛していました。そうした中でビーレフェルト実験学校では教師や研究者によって独自のカリキュラム開発が行われ、現在においても先進的な学校として名をはせています。本調査ではこの学校のカリキュラム開発の実際に注目し、理論と実践について調査しました。また、教師によるカリキュラム改善や授業改善についてハイデルベルク大学で発表やディスカッションを行いました。現在ドイツは日本をはじめとする国々で行われている授業研究（Lesson Study）に影響を受け、教師によるカリキュラム改善や授業改善の議論が行われています。そこで、日本の議論について私が発表を行った後、ドイツとの連続性および差異についてディスカッションを行いました。

成果

初めにビーレフェルト実験学校の調査に関する成果を述べ、次にハイデルベルク大学でのディスカッションについて述べます。ビーレフェルト実験学校には9月3日から9月6日の4日間、調査させていただきました。まず、ビーレフェルト実験学校の特色として学校建築が挙げられます。例えば実験学校は日本の一般的な教室とは異なり、学級間の壁がないか移動式の簡易の壁が設けられているのみで、複数の学級集団が一つの空間で過ごします。そこでは場合によっては他の学級の声や物音が学習の妨げになることがあります。しかしそこでは、他の学級、すなわち他者に開かれて討議しながら合意を形成するという民主主義的な考え方が根底にあります。実際に見学に行った際にもそうした場面が多々あり、子どもや教師が自分の活動を他の学級に説明して折り合いをつけながら学習活動を行

っていました。他にも異学年がともに学級で学び合うという工夫や他の子どもとの身体を通じたコミュニケーションを通じて、自己とは異なる他者に触れていくことが学校として目指されています。また、授業では一斉授業よりも個別学習に重点が置かれており、それぞれの子どもが自ら問いを設定して教科内容について考察する学習がなされていました。現在、世界中で問題解決能力などの汎用的能力が求められていますが、そうした傾向に対しビーレフェルト実験学校の授業実践は一定の示唆を与えるように感じられました。インタビュー調査では教員にカリキュラム作成に関する質問をいたしました。そこでは実験学校におけるカリキュラム開発の方法や依拠する理論についてお話していただき、今後の研究を進めるうえで重要な知見を得ることができました。こうした実験学校について日本では入手することが難しい史料を閲覧するため、9月7日はビーレフェルト実験学校に関する資料調査をビーレフェルト大学図書館にて行いました。

9月10日にはハイデルベルク大学で授業研究について発表を行いました。発表では海外から注目されている日本の授業研究に関する理論の多様性や歴史的変遷、授業研究の実践事例を紹介しました。議論では、教員研修や教員個人もしくは教員集団の自主学習など、授業研究を可能にしている日本の学校文化、教員文化をドイツ、アメリカなどの国々との比較の中で検討することができ、日本の学校教育の特徴を再認識することができました。それとともに、こうした文化的背景があるなかで、日本とドイツの議論をどのように橋渡しすることができるかという点については今後も検討していく必要があると感じられました。

